法務事務次官賞

小さな段差，大きな障害

埼玉県　学校法人開智学園開智中学校　１年
榎本　毬乃（えのもと　まりの）

「すいません。」
私は勇気を振り絞りました。
「すいません。助けて下さい。」
信号はすでに点滅を始めて，今にも赤に変わりそうです。私が押していた祖父の車いすのキャスターが路面と，低くなっている歩道とのほんのわずかな段差に引っ掛かり，動きが取れなくなっていたのです。まだ小さくて力のなかった私を，通りかかった一人の女性が助けてくれました。私たちは心からお礼を言いました。
ショッピングモールのスロープは，一人で歩くには大して苦労もない，わずかな勾配です。しかし，子どもたちをはじめとした歩行者への配慮でしかれた厚手のカーペットは，残念ながら車いす利用者にとって，必ずしも優しい配慮とは限りません。実際，車いすで登るには，「さあ，登るぞ。」という，特別な覚悟が必要でした。祖父も，できるだけ私に負担をかけないように，手に力を込めます。途中で力を抜くと，車いすの重さに押し戻されそうになります。私は申し訳なさそうな祖父の表情を見るのがつらくて，スロープの手前に来るたびに，なんでもない素振りをしました。そんな私の作り笑顔に祖父は気づいていたはずです。祖父が握るハンドリウムからそれが私に伝わってくるのです。私たちにしかわからない，切ないような，なんとも言えない気持ちになるのです。
エレベーターに乗るにも，気を遣います。車いすを押して，混雑したエレベーターに乗り込むのは気が引けて，乗り入れるスペースのあるエレベーターがくるまで，何本も待つこともありました。
なにより苦労したのが放置自転車です。駅前の広場には，いつもたくさんの自転車が並んでいます。猛暑のある日，私は一台の自転車に車いすを引っ掛け，自転車は次々と倒れていきました。多くの人に笑われたような気持ちになりました。もうどうしようもなく悲しくて，いったい何人の人が手伝ってくれたのか，私は見ていません。祖父に日傘をかざしてくれた女性も，私は見ていません。私が覚えているのは，あの時の気持ちと，自転車がとても熱かったということだけです。
祖父が車いすでの生活を余儀なくされてから，私は祖父と一緒に，多くのことを学びました。それは，その人の立場に立ってみないとわからないことが，社会にはたくさんあるということです。私たちは，わずかな段差を難なくまたぐことができますが，その段差がバリア（障害・障壁）であることを見過ごしています。

車いすを押すといった経験をしなければ，以前からそこにあった危険性を私は今でも知らずにいたでしょう。祖父とスロープの手前で感じた，途方に暮れるような気持ちにも，きっと出会えなかったことでしょう。また，何度もエレベーターを待つ経験がなければ，後ろに車いすや，ベビーカーを押している人が並んでいないか，振り返って確認する自分には，なれなかったかもしれません。そして，放置自転車の問題に，関心を持つこともなかったと思います。

バリアフリー新法では，車いすと車いすがすれ違える廊下や通路巾（一・八ｍ）の確保が，利用円滑化誘導基準となっています。しかし残念なことに，駅前広場はもはや広場ではなく，まるで自転車置き場のようになっています。私は毎日のように駅を利用してきたにも関わらず，自転車が放置されている景観に，何の疑問も抱きませんでした。毎日眺めているうちに，それが当たり前のように見えていたのです。車いすを押す立場に立って初めて，その景観がなにか異常なもののように感じられるようになったのです。困ったことのない人が，困っている人の立場に立って考えることは，思っているより難しいことです。私たちの暮らす社会には，障害者や高齢者など，いわゆる交通弱者にとってのバリアが，まだまだたくさんあるのです。

祖父との経験を通じて，私たちは「低い目線の社会」を目指すべきなのではないか，と考えるようになりました。「低い目線の社会」とは，車いす利用者や，小さな子ども，杖をついた高齢者のように，実際に目線の低い生活をする人たちが暮らしやすい社会のことであり，また，健常者と呼ばれる人たちが，自ら目線を下げて，交通弱者への十分な配慮を考えることのできる社会です。私たちが福祉国家を目指すには，まずは身近なバリアを取り除くこと，いいえ，まずはバリアがあることに気付くことから始めなければならないと思います。

私は毎日の生活の中で，こうしたバリアに敏感な人間になりたいと願っています。そして，バリアの存在を，なるべく多くの人に伝え，「低い目線の社会」の実現を目指していこうと思います。

私にこうしたことを気付かせてくれた天国の祖父に感謝します。